

## 中世都市ウィンチスタとサウスハンプタン(二)

——第十三世紀初葉以前イングランドの内域都市と沿海都市——

田 中 正 義

### 四

当時、デイン人は、ひとたびアルフレドの治世の晩年に彼等の首長グズルム Guthrum がウェシクス王と媾和するの己むなきに立ち到らしめられたるのちも、ロウマン・ブリテン時代にロンディニウムより西北に向いデウァ Deva ——後世のチェシア Cheshire 州の州都チェスタ Chester——にまで達せるところの Roman road ——今やアングロウーサクソンに依り受け継がれてウォーリング街道 (Wallingstreet) と称ばれた——の線以東、テムズ河口以北、の北、東、部、イ、ン、グ、ラ、ン、ド——こののちデインロー (Denelag) と総称されるに至る所の地域を確保しつつ、依然ウェシクスにとり脅威的な存在たることを止めなかった。もとより、その間にも彼等デイン人の勢力には消長があった。すなわち、エドワード長兄王のあとは、エゼルスタン Æthelstan (r. 924~939)・エアドムント Eadmund (r. 939~946)・

エアドレド Eadred (r. 946~955) と長兄王の三子が相次いで立ったが、此の間、ウェシクスは、一時的には、前記ウォトリング街道以西のマーシアの地に加えて同街道以东のマーシアの地をもデイン人の掌中より奪回せるのみならず、殊にエゼルススタンの時には、第九世紀初葉(八〇七)以来そこに侵入・定着せるアイルランドに於けるデイン人の首長オーラフ Olaf が、第九世紀中葉(八四四)以降スコットランドの地に成立せるケルト人の国アルバン Alban 国の王、またイングランド西北隅のストラスクライド Strathclyde 地方(今日のランカシア Lancashire, ウェストマランド Westmorland, カンバランド Cumberland 諸州)に於けるブリトン人の首長らを誘って、九三七年大挙侵入し来るや、これを同時代の古詩に名高いブルナンブルフ Brunanburh 「此の場所は未だに同定せられていない」の戦いに打破、輝やかしい勝利を収め、いまや多数の vassal-kings を擁して、ウェシクスをして宛かも全ブリテンを蔽う一つの「帝国」たらしめたかの観があった。<sup>(48)</sup> 而して、エアドレドのちにはエアドムンドの二子、エアドウィ Eadwig (r. 955~959)・エドガ Eadgar (r. 959~975) が相次いで立ったが、此の時代デインの反攻も暫し跡絶えて、エドガは、アルバン国王の彼に対する忠誠心を確保せんがために是れにトゥウィイド Tweed 河からフォース江湾 Firth of Forth 迄の北部ノーサンブリアの地を与え、かくて将来におけるスコットランドとイングランドとの境界線を爰にほぼ確定せしめるとともに、他方デインローをイングランドに一体化せんとするエゼルススタン王以来の伝統的政策を推し進め、其の完全にイングランド王国の一部たることを確認しつつ、デインローのデイン人に彼等の古来の法慣習に従って自治することを允許したのである。

右のアルフレド大王以後のデイン人の侵入期について爰に注目せられるのは、アングロウ・サクソンの原史料の重要部門の一つ——諸王の法典に、初めて本格的に、商品流通、貨幣流通(造幣を含む)に関する諸規定の現われるよう

になることである。

まず、アルフレドの政策を継承して即位勿々、対デイン人闘争に突入、その姉エゼルフレド *Ethelred* の夫マーシア太守エゼルレド *Ethelred* の協力を贏ち得つつ、デインローの心臓部ふかく浸透して、奪還せる各要衝に次々に城砦 (*burh*) を構築せるエドワード長兄王の第一法典には、そこに次のような諸規定が見出される。<sup>(49)</sup>

〔*α*〕 〔第一章〕〔序詞——判決並びに訴訟に関する——のあとを承け〕而して、朕の意思は、各人が彼の「商業・取引に対する」證人 (*seleama*) を有すべきこと、および、なんびとといへども町 (*port*) の外にては売買 (*ceapian*) すべからざること、しかも、彼は、町奉行 (*portgerefa*) の證言 (*sewines*) 若しくは人々の信頼し得べき他の正直なる者達の「證言」を有すべきこと、是れなり。

〔*β*〕 〔第一章第一条〕而して、いま若し誰かが町の外にて売買せんか、彼は王の (—王に対する) 不服従 (*cyrrings oferhyness*) 「ゆゑの金額—科料」に服せざるべからず。<sup>(51)</sup>

さらに、嘗にブルナンブルフ戦勝の勇士たるに止まらず、和睦を齎し治安を維持した、強力なる立法者・為政者でもあったところのエゼルスタンが、その治世の何時か、或いは九三五年に、<sup>(52)</sup> ハンプシアのグレイトリ Grately ('*æt Greatanleage*') に於て發布せる其の第二法典は、歴代のイングランド王の良き秩序を守らんとして当面せる所の主要問題の数多くのものに亘っており、極めて包括的な法典であるが、其処にも幾つかの関連規定が見出される。<sup>(53)</sup>

〔*γ*〕 〔第十二章〕而して、朕は既にして定めたり、——なんびとといへども、町 (*port*) の外にては、貳拾片を超える「如何なる動産」をも之を売買すべからざること。しかも、〔町の〕内なる其処にては、町奉行の證言に基き、或いはいま一人の正直なる者「の證言」に基き、又或いはフォウクムート (*folgemot*) 「自由民集会」の席上「公選

せられたる」役職者たち (*gerefen*) の證言に基き、売買すべきものとす。<sup>(54)</sup>

とあり、さきのエドワード長兄王の第一法典第一章 (*α*) の「ポルト外売買の全面的禁止」の規定を、一部分緩和、例外規定を設けることに依りより一層精密化しつつ、その趣旨を反復せるのち、

〔*δ*〕「第十三章」而して、朕は茲に定む、各々のボロウ (*burh*) は、祈願節 (*gongdagas*) [M. E. Rogation Days, 基督昇天祭前の月・火・水曜日三日間] 後十四夜 (日) 以内に修復せらるべきことを。

〔*ε*〕「第十三章第一条」第二に、一切の売買は町 (*port*) の内にて行はるべきことを。<sup>(55)</sup>

〔*ζ*〕「第十四章」造幣人 (*mynelere*) に関して。第三に、王權 (*cynges onweald*) の及ぶ限りのすべて「の地域」に亘りて「つの圧造貨幣 (*mynet*) の存すべきことを。而して、なんびとといへども町 (*port*) 以外の処に於ては貨幣を圧造 (*mynelian*) すべからざることを。<sup>(56)</sup>

〔*η*〕「第十四章第一条」而していま若し造幣人にして「品位の粗悪なる或いは量目不足せる圧造貨幣の製造 (・発行?) に従事せしゆゑを以て」罪有りと判決せられんか、彼の夫れを以て該罪科 (*fel*) を犯せるところの手は、切り落され、該造幣所 (*mynetsmithpe*) 上に「高々と」掲げらるべきなり。然りながら、また、いま若し「単に他人に依る」告発 (*tyht*) 「のみ」がなされて、彼にして「夫れに關し」雪冤 (*ladian*) せんと欲するとせんか、その場合は彼は灼熱の鉄 (*hate isen*) 「の一片を素手にて握ることに依る神明裁判」に訴へ、そのことに依り彼の夫れを以て該罪科 (*facen*) を犯したりと告発せられぬところの手の容疑を晴らす (*ladian*) べきなり。而していま若し彼にして該神明裁判 (*ordal*) にて有罪なること立證せられんか、此処なる前段に定められたると同じき「刑」(晒手) <sup>(57)</sup> が科せらるべきなり。

〔*θ*〕「第十四章第二条」キャンタベリ (*Canterbury, Kent*) には七名の造幣人「存すべく」、〔うち〕四名は王

の、二名は「大」司教の、一名は「聖アウグスティヌス」修道院長の「夫れ」、ロチスタ (Rochester, Kent) には「三名の造幣人存すべく」、[うち]二名は王の、一名は司教の「夫れ」、ロンドンには八名、ウィンチスタには六名、ルーイス (Lewes, Sussex) には二名、ヘイスティングズ (Hastings, Sussex) には一名、いま一名「の造幣人は」チチスタ (Chichester, Sussex) に「存すべく」、サウスハンプタンには二名、ウェアラム (Wareham, Dorset) には二名、ドーチスタには一名、エクシタ (Exeter, Devons) には二名、シャーフツベリ (Shaftesbury, Dorset) には二名、そのほか、爾余のボロウ (Burg) には「すべて」一名「の造幣人、常に存すべきなり」<sup>(58)</sup>。

「と」[第二十四章第一条]しかうして、如何なる取引 (cyping) も日曜日 (pl. *Summondagas*) には生ずべからざることを「朕は茲に定む」、かくて、いま若し誰かがそを為さんか、彼は、該商品 (pl. *ceapes*) を没収せられ、且つは科料として (*to wite*) 参拾志を「王に對し」支拂はざるべからず。<sup>(59)</sup>

而して、最後に、エゼルスタン以来のデインロー統合政策の推進者で、「人々の記憶のなかにて彼以前に存せるいづれの王よりも人民の平和を増進せり」(folces friþ bette, swiþost para cýninga, þe ær him gewurde, be manna gemýnde) と曰われ、晩年 (九七三) バース (Amennescester—Bath, Somerset.) において全イングランドの王として戴冠式を挙行したことで有名な、エドガ王の第三、第四法典には、われわれは又次の如き関連諸規定を読む<sup>(61)</sup>。まず、その第三法典 (九五九—九六三)。

「κ」[第八章]しかうして、「一つの庄造貨幣 (*an mynet*)、王権 (*cýnges anweald*) の及ぶ限りのすべて「の地域」に亘りて通用 (*gange*) すべし、しかうして、そを (—当該貨幣の受領を) なんびといへども、拒否 (*forsacan*) することあるべからず。

〔λ〕「第八章第一条」しかうして、「現に」ロンドンにて、またウィンチスタにて遵守せられるがごとき、一つの容積、一つの重量（すなはち一つの度量衡）、王権の及ぶ限りのすべての地域に亘りて」通用 (*gangen*) すべし。

〔μ〕「第八章第二条」しかうして、壹ウェイ(約一五〇封度の重量)の羊毛は、百貳拾片(すなはち二分の一磅)にて流通 (*gangen*) すべきなり。

〔ν〕「第八章第三条」しかうして、いま若し誰かが公然と又は密かに夫れをより廉価に (*undoror*) 売却 (*sillan*) するとせんか、そを売却する彼、そを購入 (*bigan*) する彼は、共に王に対して六拾志〔の科料〕を支払ふべきなり。<sup>(23)</sup>

次に、その第四法典(九六二—九六三)。

〔ξ〕「第六章」しかうして、人は誰しも、彼がボロウ (*burg*) にて或いは又ウェバンテイク (*weþengeteac*) (—ハインドレド) にて購入 (*bigan*) し又は売却 (*sillan*) するものの、有らゆる商品 (*pl. ceapes*) を下記の者の證言に基きて、購入し又買却すべし。

〔第六章、第一、第二条省略〕

〔ο〕「第七章」何らかの商品 (*sing. ceap*) を求めて「遠方へ」騎行する者は誰しも、彼の求むるものの何たるかを「予め」彼の隣人 (*neahgebur*) (近隣農民<sup>イニフリーヤ</sup>) たちに告知 (*cyþan*) すべし。しかうして、彼の帰宅するや否や、彼はまた、彼の該商品を如何なる者の證言 (*geaytnes*) に基きて購ひしやを告知すべきなり。

〔π〕「第八章」然れども、いま若し彼にして、何らかの旅(遠出) (*fara*) の途上に在りて、彼の馬にて出掛けしとき「予め」そを「隣人たちに」告知しをらざりしに、図らずも (*unmyndlinga*) 何らかの商品を調達 (*aredian*) するとせ

んか、彼は、彼の帰宅するや否や、そを「隣人たちに」告知すべきなり。しかうして、いま若し夫れの畜牛(家畜)(*orf*)ならんか、彼は、そを、彼の村(*hunschies*)「の住民たち」の證言にもとづき、その共同放牧場(*gemene lues*)に贅すべきなり。<sup>(63)</sup>

以上の如き法典よりの、商品流通・貨幣流通(造幣を前提とする)に関する諸規定の細やかなる抜萃のみを以てしても、われわれは、第九世紀末葉より第十世紀末葉に至るデイン人の侵入期、イングランドに、如何に画期的な商品・貨幣經濟の展開が見られたか、凡そ之を想像するに難くないであらう。もちろん、法的規定は即目的に歴史的現實を表わすものではない。われわれは、そこに、法典の陳述史料(*Redende Quellen*)としての限界の存することを瞬時も忘るべきではない。然しながら、夫れが又飽くまで歴史的現實の所産であり、歴史的現實を何らかの仕方 に於てその裡に反映していること、このことは、何人も異論を挟み得ない所であらうと思われる。

デイン人が、古來戰爭と海賊と商業とは「*Trinit*」を為すとする所の俗諺の好個の世界史的例證でもあるかのよう に、海賊たり戦士たると同時に商人であつたことは、夙に、アルフレドが彼等の首長グズルムとの間に、彼のロンド ン恢復(八八六)後、締結せる一つの協定——『アルフレドとグズルムとの平和』(*Alfredes and Guprunes Friþ*) (八八六—八九〇)<sup>(64)</sup>において、

「*þ*」第四章「しかうして、各人は人間(「奴隸」)また馬匹また牡牛「の購入」に際しては、彼の證人(*getyman*)を承知(*witan*)しをるべき」と。

「*σ*」第五章「しかうして、われわれ(—アルフレド・グズルム)すべては、人が宣誓を為せし彼の日に、「今後」

如何なる「アングロウーサクソンの」奴隷(*peow*)も亦自由民(*freo*)も、彼等(デイン人)に属する誰かが「許可なくして」我々(イングリシュ)の許に馳せ来らざるが如く、許可なくして「デイン人」軍隊(*here*)「[の集团的定住地域]」に赴くを許されざるべきことを、確約せり。然りながら、いま偶々必要に迫られて(——物質的生活における欲望充足のために)、彼等(デイン人)のうちの誰かが、家畜(*wife*)を以て、或いは動産(*weh*)を以て、我々(イングリシュ)と交易(*wipure bige habban*)せんと欲するが如き事態にして生ぜんか、或いは又我々(イングリシュ)が彼等(デイン人)と「交易せんと欲するが如き」事態にして生ぜんか、その事は、平和「[的行為]」の保證(*wed*)として、又夫れにより凡そひと(当該当事者)が曇りなき背面(*clæne bac*)の持ち主たること(——彼に詐欺・欺瞞のごとき邪念の存せざること)の確かめられ得る證拠(*sawulung*)と<sup>(65)</sup>して、「一般に」担保(*pl. gislas*)が提供せらるるてふ仕方にて、許可せらるべきなり。

とあることに依つても、今や明白である。

斯かるデイン人の外的刺激も協働して、爰に漸く生産の余剰を確立せしめる程に其の生産力の伸張を見た一般にアングロウーサクソン時代末期のイングランド社会は、萌芽的な商品交換の場として、そここに地方的、局地的、市場—ポルトの力強い生長が見られることとはなつたのである。その場合、先ず注目すべきは、初めポルトは、少くとも法制上は、かの軍事的拠点—ポロウ(ブルフ)とは区別せられた、と云うことである。このことは、いま、既出エゼルスタン王第二法典の規定「[*r*]・[*e*]」を規定「[*ð*]」と照合してみると、自ら瞭らかな所であらう。すなわち、「[*r*]・[*e*]」において、ブルフは、「祈願節」以後二週間以内に修復せらるべき城砦として、「[*r*]・[*e*]」における、そこで売買の行われる所のポルトとは截然区別せられているのである。而も、われわれは、注意しなければならない、——斯か



るポルトにおける交易は、元來ポルト外における——農村における交易に端を發せるものなることを。と云うのは、ポルト以外における交易を禁止し、當爲としての交易をポルト内の夫れにのみ局限するという、法的規制それ自体、當時既に農村における農業と工業との直接的結合の状態——農民家族が家内に於てまず以て自家需要のための使用価値の生産たる家庭的家内仕事に従事するという状態、が最早一部綻び始めていたことを端的に物語る以外の何物でもないからである。事實、「r」における規定は、抑々ポルト外における売買の絶対的全面的禁止には非ずして飽く迄も相對的部分的禁止にしか過ぎず、當時の爲政者も亦歴史的現實は之を輕視すること能わずして、二〇ペンス以下の小額の動産売買の場合之をポルト外に就いても暗黙の裡に認めているのであるが、更に第十世紀前半のエゼルス王の時代から同世紀後半のエドガ王の時代に至ると、その第四法典の規定「 $\epsilon$ 」に見らるることく、最早商品の購入・売却の合法的な場としてハンドレドが公然その姿を現わして來ているのみならず、規定「 $o$ ・ $\pi$ 」に於ては今や商品の購入・調達者としてそこに明々白々に村落共同体の一員たるもの（——農民）が登場し來つてさえているのである。而も、此のエドガ王第四法典の規定「 $\epsilon$ 」においては、既にわれわれの見たる如く、最早商品の購入・販売の場としてそこにポルトならざるボロウ（ブルグ）が現われているのであつて、このことは、曾てひとたび、エゼルス王第二法典における造幣關係の二つの規定、（一）ポルト外における貨幣圧造を禁止する規定「 $\zeta$ 」、（二）各ボロウ（ブルグ）は少くとも一名の造幣人を有すべしとなす規定「 $\theta$ 」、の同時存在を通じてわれわれに推理せられ得たところの、一般にポルトとボロウ（ブルグ）とのあいだの equivalence の關係が最早單なる推理の域には止らざることを——初め異なる二つの存在として出發したボロウ（ブルフ・ブルグ）とポルトとが此處に到つて現實に今や融合・合一せることを、われわれをして認識せしめるのである。<sup>(67)</sup>而して、その際、此處でわれわれの留意すべきは、斯かるポ

ロウ(ブルグ)がもともと王を其の Lord となすもの、王以外の如何なる Lord をも上に戴かざるものであったと云う事実であつて、その点大陸における例えばドイツの典型的な旧都市 *Stadte* が夙にその領主たりしものの司教であつたのとは凡そ趣を異にしているのである。<sup>(68)</sup> このことは、エドワード長兄王時代以来 *portberewja* がかのアルフレッド大王時代における *wicberewja* と同様に(前号二四—五頁参照)王の町奉行であつたことにわれわれが想到するとき、思い半ばに過ぎるものがあるであらう。

いいたい、当時イングランド王は、未だなお部族王たるその本来の基本的性格を十分には払拭し居らざるものであつたとは言え、やはり此の時代の大大陸の諸国王同様一個の *Christian king* <sup>(69)</sup> であつた。その点において彼の第一の任務・課題は彼の王国内における一般的な「平和」の維持に存した。その場合、斯かる平和を破壊する「暴力」に容易に寄与すべきものとしてはいま「窃盜」に如くものは無かつたがゆえに、われわれが既に見たるごとく、エドワード長兄王よりエドガ王に至る代々のイングランド王は、常に売買・交易に際しては、夫れがその対象物のもと盗品ならざることを證言する證人の面前で行わるべきことを、其の必須条件として要求したのであつた。斯かる王のボロウ(ブルグ)における平和の破壊を極力回避し、之が破壊者に対して苛酷なる刑罰を以て臨み、飽くまで平和を維持せんとせるところの伝統的政策こそ、たとえいまメイトランドがイングランドにおいては未だ曾て市場がボロウの *legal essence* たりしごとく、*rural township* たる村落 (*vill*) より謂わば *urban township* たるボロウを区別する *the original principle* たりしものは「市場の平和」(*Markfriede*)には非ずして飽くまづ「城市の平和」(*Burgfriede*)たりしことを如何に力説・強調しようとも、客觀的には、商品交換のごとき平和的行為の遂行に良好なる環境条件を提供したることは言を俟たないところである。<sup>(70)</sup>——将来イングランド中世都市の通念となるべき、都市は平和の聖域

(sanctuary) なりてふ觀念は、茲に胚胎したのであった。

但、此処に一つ、今後のイングランド中世都市の發展を展望する上にわれわれの断じて看過すべからざる事實がある。夫れは、当時のボロウ(ブルフ)が、メイトランドの夙に指摘せるごとく、一般的(General)・民族的[「部族的」(national)な集會組織の單位たる所の集會(moot, gemot, mot)の開かれる場所であつたと云う一事である。このことは、既に、われわれが曩に見たエゼルスタン王第二法典第十二章の規定(「7」)に於て、都市内における動産の売買に際して必要とされる所の證言として、町奉行の夫れ、一人の正直人間の夫れと並んで、そこに folk-moot (folkgemot) 選出の gerefa なるものの證言が挙げられていることに徴しても、之を明らかに認識することが出来る。即ち、此の場合のイエレヴァは、瞭らかに町奉行のごとき王のイエレヴァではない。而してその選出母胎たるフォウクムートこそは、シャイア、とくにハンドレドの中核をなせる人民集會(民會)と、その歴史的本質を同じうするところの、都市における人民集會(民會)であつたのである。斯かる都市のフォウクムートが、斯かるものの存在の裡に同時代のフランス都市に比較してアングロウ・サクソン都市の有せる優位点を發見するブティーデユタイイの言うがごとく、果してゲルマン的なフンデルトシャフト Hundertschaft 制のアングロウ・サクソンにおける「温存」の結果を表わしているか否かはいま姑らく問わず、斯かる都市のフォウクムートに依つて代表される一般にフォウクムートこそは、抑々アングロウ・サクソンの本来 moot-worthy (mootunþi) な自由民(frig-man)が彼等の有せるフォウクライト(folk-right; folc-right)に拠つて其處に出席する權利[と義務と]を有した所のものであつたのである。その意味に於て、此の都市の人民集會(民會)の基礎・前提をなす所のものこそは、当時汎く一般にアングロウ・サクソンの自由農民の構成せるところの村落共同体の夫れであつた、と断定することを得よう。<sup>(12)</sup>

なお、斯かる都市の人民集会——夫れは *landrit* に対して、*burhrit* を執行することになる——については、州の夫れ、ハンドレドの夫れとの関連において、エドガ王第三法典に、次のとき未引の一規定が存する。

〔2〕 「第五章」 「集会 (*gemot*) に関して。」 しかうして、人は、夫れがさきに制定せられをるがごとく、ハンドレドの裁判集会 (*hundredgemot*) に出席すべきなり。

〔3〕 「第五章第一条」 しかうして人は、一年に三度びボロウの裁判集会 (*burhgemot*) を開催すべく、又一年に兩度州の裁判集会 (*scirgemot*) を「開催すべし」。

此の場合、規定〔2〕の、「夫れがさきに制定せられをるがごとく」とは、エドガ王の第一法典と謂われる通称「ハンドレド律令」 (*The Hundred Ordinance*) に、

〔4〕 「第一章」 第一に、彼等(ハンドレドの居住者)は、常に四週間毎に会同すべきこと、しかうして各人はいまひとりの者(—彼の仲間)に対し「正邪を明らかにして」正当なる取扱ひ(—裁判)をなすべきこと (*þæt hi heo gegaderian ̅a̅ ymb feower wucan, 7̅ wyrc selc man oprum riht.*)。

とあるのを承けているのである。

さて、以上のエドワード長兄王よりエドガ王にいたる諸王の法典のまことに簡單なる検討を通じてさえもわれわれにほぼその全容が推し測られた第九世紀末葉ないし第十世紀末葉の時点のイングランドにおける商品交換の展開度といま具体的に相関連する所のあるのは、言うまでもなく此の時代の此の国の幣制の發展でなければならない。そのことは、エゼルスタン王第二法典第十四条 (〔5〕) に何人も市場町(ポルト)外において貨幣を圧造すべからずとなす

規定の存することからも凡そ之を察知することが出来よう。

今日、最も新しい英国貨幣史概説の著者サザランドは、アングロウ・サクソンの貨幣の歴史的発展を、ほぼ六〇〇年以降七七五年に至る太初期、ほぼ七七五年以降八七一年に至る中期、八七一年のアルフレド大王即位時より一〇六六年の「ノルマン征服」に至る後期、の三段階に分割、叙述しているが、<sup>(75)</sup>我が国における此の時代の貨幣史の専攻家戸上一氏に拠れば、アングロウ・サクソン時代の貨幣は、凡そ貨幣の一般的交換手段・価値尺度・価値貯蔵手段という三つの機能別に即して考察してみた場合、第五・六世紀の銅貨 *minim*、第六・七世紀の金貨 *thryms* には未だそれらに一般的交換手段としての機能を認めることは困難であり、第七世紀後半—第八世紀中葉の銀貨 *scut* にいたっても、なお夫れは一般的・無条件的に受領を保證せられた「一般的交換手段」としては機能しておらず、斯かる機能を發揮する貨幣としては、第八世紀末葉の七〇年代半ば以降出現する銀貨 *pening*——元来、出来上がりの夫れの表面 (obverse) と裏面 (reverse) とにおける発行者 (主権者——この場合はマーシア王オッファ——) と造幣人 (造幣所) との銘文 (legend, inscription) をそれぞれ彫った上下二個の極印 (打ち型 *types*) のあいだに、地金を挟み、打ち合せることに依つて庄造 (hammer) せられた——を以て嚆始となす、とせられる。<sup>(76)</sup>而して斯かる *pening* 銀貨は、以後第九世紀初葉 (八二九) マーシアに取つて替つたウェシクスに依り繼承せられて、同世紀末葉以降アルフレド大王並びにその後継者たちに依つて一層發展せしめられることとなつたが、<sup>(77)</sup>その結果、夫れは第十世紀初葉ここに「一応」<sup>(78)</sup>「法定通貨」(legal tender) として初めて法典上で言及されるに到つたのであつて、そのことは、既にわれわれの之をエゼルスタン王第二法典に於て認め得たところである。

然しながら、そこには問題がある。と云うのは、同法典第十四章の規定 (*2*) では、瞭らかにウェシクスの「王

権の及ぶ限りのすべての地域に亘りて一つの「圧造貨幣」の流通すべきことを謳っておりながら、同章の第二条(10)では、一方においてボロウごとに少くとも一名の造幣人の存在すべきことを規定しつつ、他方そのボロウ名の挙げられたるもの——十二ボロウに就いて是れをみてみると、そこには特にその旨断つてない圧倒的多数の王の造幣人に混つて、キャンタベリに、二名の同地大司教の造幣人、一名の同地の聖オーガスティン修道院長の造幣人、ロチスタに一名の同地司教の造幣人、がはつきりとその存在を許容せられているからである。このことは、これらの大司教・司教・修道院長が各自の造幣人を有することに依つて自己の銘文を極印した圧造貨幣を発行し得たのか——換言すれば造幣権が直ちに発行権に結び付くのか(——とすれば、「王権の及ぶ限りのすべての地域に亘りて一つの圧造貨幣」と云う原則はどうなるのか)、それとも中央にて作製せられた・少くとも通貨表面の極印が各地の造幣所に送られ、夫れが当該造幣所・造幣人の銘文を有つ通貨裏面の極印と併合されて、いま一様なるペニング銀貨の圧造が行われ、当該造幣所所在地の有力者(大司教・司教・修道院長等)は単に発行に伴う利益の配分に与り得たに止まるのか——すなわち、唯単に極印の中央管理 (central control) のみが行われて、造幣そのことに関してはむしろ地方分権化 (decentralization) <sup>(78)</sup>、それが進行的か、如何なることを意味するのか、——窮極的には不明とせられねばならぬ。而も、法典の規定を単純に当時の歴史的現実として受け取ることの非なるは、此の造幣の場合にも亦当て嵌る。と云うのは、今日進歩せる補助科学——古銭学 (Numismatik) の成果に従えば、発掘され出土した圧造貨幣の裏面の銘文に依つて知られる所のエゼルスタン王時代の造幣所所在地は、ウィンチスタ・サウスハンブタンを含めて三十箇所乃至三十三箇所の多きを算え得るのであるが、その中の一つ、当時アイルランドのデインに対する北西部イングリランドの守りの要をなせるチェスタ <sup>(79)</sup>の造幣所はエゼルスタン王の治世年間二十七名の造幣人を擁していたことが知ら

れているにも拘らず、われわれは同王の第二法典第十四章第二条の規定（ $\theta$ ）の文面からは、既に見たる如くチェスタなる地名だに是れを見出すことを得ないからである。

右にエゼルスタン治下の幣制に就いてわれわれの抱いた疑問は、然しながら、今やエドガ王の時代に至ると、漸く解消する。というのは、既にわれわれが見たる如く、エドガ王第二法典第八章の規定（ $\kappa$ ）は、エゼルスタン以来の「王権の及ぶ限りのすべての地域に亘りて一つの庄造貨幣」なる原則を再確認した上で、更に一步を進めて何人と雖も該の貨幣の受領を拒否し得ざるものとなし、之が受領の強制さるべきことを謳っているのであって、此処にいたって今や当該庄造貨幣——*pening* 銀貨は、文字通り、一般的・無条件的にその受領を保證せられた所の「一般的交換手段」として、強制通用力ある貨幣即ち法定貨幣（*legal tender*）として、確立せることを知らしめられるからである。かくて、斯かる法定通貨の発行権は、独り王にのみ帰属することとなり、今や全国に亘って汎く各地に分散所在せる多数の造幣所における王（又は特定の高位聖職者たち）<sup>(61)</sup>の造幣人たちは爰に中央より取り寄せられた通貨表面の極印（*die*）を当該造幣所の造幣人の銘文（*legend*）を有つ通貨裏面の極印と併せて一様なるペニング銀貨を庄造することとなった。すなわち、其処に認められるのは、単純なる意味における（——或いは近代国家に於けるが如き）幣制の統一、その中央集権化（*centralization*）には非ずして、極印の中央管理を媒介とする、夫々相対的独立性を有するところの多様な地方的造幣の統合＝揚棄という、飽くまでもメヒャーニシュならざるデアレクテイシユな事態の出現であつたと思われる。而して、夫れこそは、此の時代漸く加速度的に進行せる「封建化」と「王権伸張」との同時並行的な過程——「征服」以後いわゆる「集権的封建制」成立に帰結すべき過程、のまさしく一局面に他ならなかったのである。

尚、今日の古銭学者たちは一致して、曾てスントーオールバンズ St. Albans の修道僧ロジャー・オヴ・ウエンドウ  
ヴァ Røger of Wendover (d. 1236) が第十三世紀初葉その『歴史記述の精華』(*Flores Historiarum*)中で九七五年  
の諸事件について語りつつ、「次いで彼(エドガ)はイングランド全土を通じて一つの新たな貨幣の造らるべき  
ことを命じたり (Deinde per totam Angliam novam fieri praecepit monetam,...)」と誌した<sup>(82)</sup>のは事実を表わすと  
して、エドガ王治世の末年(九七三?)に「一つの幣制改革が行われたことを主張している。夫れに拠れば、此の改  
革の精髓は、まさにエドガ王のために働いたところの造幣所の数にこそ求められねばならないのであって、多くの  
造幣所が此の王のとき貨幣の圧造に従った。而して彼がもっと長命であつたならば、彼は、このちエゼルレド二世  
の治下に於て見られることになったように、一定年数の間隔を置いて、周期的に通貨の更新——ペニング銀貨の特定  
様式 (type) の更改を試みたことであろうし、又、彼の造幣所数増加政策は、斯かる通貨更新のその都度ハンパ河—  
シュルウズベリ Shrewsbury (Shropshire) —プリストルの線以東のイングランドの殆ど何処からでも、ひとが旧貨  
を新貨に取り替えるために特定の造幣所まで(歩いて一日で往復の可能な距離の)約一五マイル以上旅せずに済むこと  
を得せしめたであらう、と言われるのである。<sup>(83)</sup>

以上、われわれは、アルフレド大王以後第十世紀末葉に至る迄のデイン人侵入時代のイングランドにおける、広汎  
なる商品流通・貨幣流通の展開の様態を文字通り瞥見したのであるが、斯かる時代わが王国における首都ウィンチス  
タ、——今やエドガ王の第三法典に於て(第八章第一条)、ロンドンと並んで、王の全国的な度量衡統一政策実  
施に当りそのモデルたるべき度量衡制度を現に実施し居る都市として挙げられた、ウィンチスタの都市民は、斯かる



一般的な商品・貨幣経済の成長と具体的に如何なるかわりを有ったのであろうか、——夫れがわれわれの次の課題でなければならない。

(48) 古代英語で書かれた「ブルナン・ブルフの戦い」の critical edition として Alistair Campbell, ed., *The Battle of Brunanburh* (London, 1938). 因みに「ブルナン・ブルフ」なる地名の identification の問題に関しては、戸上「アールスタン王の貨幣政策について」(『国民経済雑誌』第一三八巻(一九七八)第六号、六一頁註10参照)。

(49) 青山吉信「イギリス封建王制の成立過程」(東京大学出版会、一九七八)、四二—三頁の貴重な地図参照。

(50) 以下、本法典のテクストは、*Die Gesetze der Angelsachsen*, hrsg. v. Felix Liebermann (3 Bde., Halle, 1903-16; Unveränderter Neudruck, Aalen, 1960), I, 138-141; *The Laws of the Earliest English Kings*, ed. by F. L. Attenborough (Cambridge, 1922), pp. 114-117; *Ancient Laws and Institutes of England*, ed. by Benjamin Thorpe (2 vols., London, 1840), I, 158-161 に拠る。訳は必ずしも此れらのテクストに附せられたるものに依らず。

(51) [1] 7 ic wille, þæt gehwile man hæbbe his geteaman; 7 nan man ne ceapige butan porte, ac hæbbe þæs portgerefan gewitnesse oþþe opera ungeligenra manna, þe man gelyfan mæge. / [1, 1] 7 gif hwa butan porte ceapige, þonne sy he cynriges oferhymnes scyldig; . . . 右の文中の 'ceapian' は、ノーブ・カリービー・マン・アレン・ボロ・ウォル、J. & Toller, T. N., *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898; rep., 1972), p. 148, s. v. ceáþian. 因みに、此処に謂う所の「王に対する不服従ゆゑの科料」の額が二〇シリンズであることは、かのフォウランズ *folcland* なる名辞の現われる陳述史料三つのうちの二つたる、此の法典の著名な第二章、とりわけ其の第一条の規定に依つて明らかである。前掲『インベランズ封建制の形成』(御茶の水書房、一九五九年、新版、一九七七年) 一二八頁参照。

(52) Cf. Elert Ekwall, *The Concise Oxford Dictionary of English Place Names* (Oxford, 1936; 4th edn., 1960), p. 203, s. v. Grately.

(53) 以下、本法典のテクストは「リーバーマン・アテンボロ・ソープの夫々の前掲書に依拠するも、訳は必ずしもこれらに従ふ」。Liebermann, a. a. O., I, 150-166; Attenborough, *op. cit.*, pp. 126-143; Thorpe, *op. cit.*, I, 198-215. なお訳の

は『*English Historical Documents*, Vol. I, ed. by Dorothy Whitelock (London, 1955), pp. 381-6 にある。

- (45) [12] Ond we cwædon, þæt mon næme ceap ne geceapige buton porte ofer xx penega; ac ceapige þær binnon on þæs port-gerefan gewinnesse oþþe on opres unlygnes monnes, oþþe eft on þara gerefaena gewinnesse on folce-mote. 一般にフォウクモートにこづて、前掲拙著、特にその九二一四、一三三、一四二一四、一六六、一八九九〇、一九五—六頁の諸処、参照。

- (55) [13] Ond we cweþap, þæt ælc burh sy gebet xliii niht ofer gongdagas. / [13, 1] Ober: þæt ælc ceapung sy binnon port. 此の章の前置節 'we cweþap' が前章の前置節 'we cwædon' と形が異なるのは、或いは本章から第十八章迄の諸規定が、本来此の法典以前に發布せられた一連の別個の制定法を(エザルスタン王の治世の間か或いは若干の時代に)此の法典に組み入れた結果生じた所の形式上の齟齬と考えられる。同じことが、本章第一条の規定が、われわれが義に見た前第十二章の規定と、その表現形式に於てこそ飛躍的に異なれ、その趣旨に於て異ならぬこと(——実質的な内容重複)の原因にせよと考へられ。cf. Attenborough, ed., *op. cit.*, pp. 113, 208(note); Whitelock, ed., *Eng. Hist. Doc.*, I, 384(note 2).

- (95) [14] Be myneterum. Pridda: þæt an mynet sy ofer eall þæs cynges onweald: 7 nan mon ne mynetige buton on port. 「**圧造貨幣**」(hammered coin) —— 鑄造貨幣(cast coin) なるやと——の意味にこづは、戸上「貨幣の徴税機能にこづ」(『国民経済雑誌』第二一八巻(一九七三)第六号、三八頁註1参照。

- (125) [14, 1] 7 gif se mynetere ful wurpe, slea mon of þa hond, þe he þæt ful mid worthe, 7 sette up on þe mynetsnippan; 7 gif hit þonne tyhle sy, 7 he hine ladian wille, þonne ga he to þam hatum isene, 7 ladige þe hond, mid þe mon tyhþ, þæt he þæt facen mid worthe; 7 gif he on þam ordale ful wurpe, do mon þæt ilce, swa hit æt beforan cweþ. 此処に語られてゐる ordale は、我が古代に於ける「**探湯**」(くぐり湯)を髣髴せしむる。なお、イネス王法典第三十六章(Attenborough, ed., *op. cit.*, pp. 48 f.) 参照。

- (85) [14, 2] On Cantwarabyrig vii myneteras: iiii þæs cynges 7 ii þæs biscepes i þæs abbodes; to Hrofeceastre [iii]: ii cynges 7 i þæs biscepes to Lundenbyrig viii; to Winthacestre vi; to Læwe ii; to Hæstingaceastre i; oper to Cisseceastre; to Hamtune ii; to Werham ii; to Doraceastre i; to Exceceastre ii; to Scaefesbyrig ii; elles to þam oþrum burgum i. 因みに「**ノーチスタ**」は「人」と云う箇所は、元来、後世「**ランタザニア**」朝(ヘンリ二世 Henry II

- (r. 1154-1189) の治世の初年に成れる『諸法典のラテン語訳』『古代英法類纂』(Quadrupartitus) 456『史源考』(Quellenkunde) 1124 の語を採る (Interpolation) である。
- (35) [24, 1] 7 þæt nan cyping ne sy Sunnondagum; gif hit þonne hwa dó, þoige þæs ceapes 7 gessylle xxx scil to wile.
- (36) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. by Charles Plummer (2 vols., Oxford, 1892-99), I, 114; *The Anglo-Saxon Chronicle, A Revised Translation*, ed. by Dorothy Whitelock with D. C. Douglas & S. I. Tucker (London, 1961; 2nd impr., 1965), p. 75.
- (37) 24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語の法典のラテン語訳、リーベン・アン・デ・フーヘの『前掲書第一巻』100—115頁、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。
- (38) [8] 7 gange an mynet ofer ealne þæs cynnges anweald, 7 þone nan man ne forsaec. 7 [3, 1] 7 gange an gemit 7 an gewilte, swilce man on Lundenebirg 7 on Wintecastre healde. 7 [8, 2] 7 ga seo wæge wulle to cxx p, 7 nan man hig undeor ne sille. 7 [8, 3] 7 gif hwa hi þonne undeor sille, oþþe eawunga oþþe dearmunga, gilde ægþer þam cynge lx scill' ge se þe hi sille ge se þe hi bigce. 24<sup>4</sup> の語を採る。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。
- (39) [6] 7 ælc mon mid heora gewitnyss bigce 7 sylle ælc þeora ceapa þe he bigcege oþþe sylle aþer oþþe burge oþþe wæpungefæce. .... [7] 7 se þe æfter ænægum ceape ride, cyþe his neaheburum ymbe hwæt he ride; 7 þonne he ham cume, cyþe eac on hwæs gewitnyss he þone ceap gebohte. 7 [8] Gif he þonne unmyndunge ceap æredige ut on hwylcere fare, buton he hit ær cyðde þa he útrád, cyþe hit þonne he ham cyrne; 7 gyf hit cuce orf biþ, mid his tuncscipes gewitnyss on gemæne læse gebringe. 1<sup>5</sup> ハンベロー・サン・アン・デ・フーヘの『陳述史料』上此処に初め現われる。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。
- 決定を確認した。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。24<sup>1</sup> 24<sup>2</sup> の語は、ハーブの『前掲書第一巻』166—172頁、及び『*The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I*, ed. by A. J. Robertson (Cambridge, 1925; Reprinted, New York, 1974), pp. 24-39』24<sup>3</sup> の語を採る。

assembly confirmed its decisions) を意味し、一般にイングランド北東部の、レスターシャー Leicestershire, リンカンシャー Nottinghamshire, ダービーシャー Derbyshire とヨークシャー Yorkshire のノーースライディング North Riding 並びにウエスターライディング West Riding 等、デイン人の入植せる地域における、司法上結合せしめられた地方的区劃一地方行政単位であると同時に、その中核としての当該地方の人民集会それ自体をも表わした点に於て、まさにハンズンと何ら異なるところはない。なお、後段の九五—六頁のハンズンに關する記述を参照。 Cf. F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England* (Oxford, 1943; 3rd edn, 1971), pp. 504 f. (i) テクスト [10] における 'neahgebur' の語幹をなす 'gebur' については、拙著『イングランド初期経済史の諸問題』(山川出版社、一九七八)、四〇—五四頁、参照。

(64) 以下、此の協定のテクストは、リーバーマンの前掲書第一卷二二六—九頁、アテンボロの前掲書九八一—〇一頁、ソープの前掲書第一卷一五二—七頁に拠る。なお、ウァイトロクの前掲史料集は、此の協定の訳文のみ、その三八〇—一頁に収む。

(65) [4] 7 þæt ælc man wile his getyman be nannum 7 be horsum 7 be oxum, / [5] 7 ealle we cwædon on þam dæge þe mon þa apas swor, þæt ne þeowe ne freo ne moton in þone here faran butan leafe, ne heora nan þe ma to us. Gif þonne gebyrige, þæt for neode heora hwylc wip ure bige habban wille oppe we wip heora mid yrf 7 mid æhtum, þæt is to þafanne on þa wisan, þæt man gislas sylle fripe to wedde 7 to swutlunge, þæt man wile, þæt man clæne bæc hæbbe.

(66) 此のエゼルスタンの第二法典の規定——元来エドワード長兄王の第一法典第一章のポルト外売買の全面的禁止規定の適用を二〇ヘンスよりも高価な不動産の売買の場合に限った——は、その後、エゼルスタン自身に依つて、最終的には、一切の制限が撤廃せられ、ポルト外の売買の自由は全面的に認められることとなった。すなわち、そのアングロウ—サクソン語のオリヂナルテクストが最早失われ、前掲 *Quadrupartitus* (註(58)参照) に今日そのラテン語訳のみ残るところの同王の第四法典第二章には、「[しかうして先づ第一]に、グレイトリに決定せられし一切の制令は、町 (*civitas*) における取引 (*mercatus*)、日曜日における [取引] [関係の制令] を除きて、遵守せらるべき」(Et hoc imprimis est, ut observentur omnia iudicia, quæ apud Greteleiam posita fuerunt, præter mercatum civitatis et diei Dominice.) とあり、又同王の第六法典第十章には、「此の集会 (——本法典冒頭に見ゆるグレイトリの集会) にて定められし制令は、既に廃止せられたるもの、すなわち、日曜日における取引、並びになんびとも衣食足りて信頼しうる證人を以て町の外にて取引し得ること、[に關する制令] を除きて、遵守せらるべき」と (þæt man þas domas healdan sceoldan, þe on þissum gemote gesette wæron, buton

þam þe þæt ær ofaðone wæron; þæt wæs Sunnandægcs cyþing, 7 þæt man mid fulre gewitnesse 7 geþreowre moste ceapian butan porte.)」である。以て、當時の露々平たる商品交換展開の大勢を想うべきである。因みに、日曜日における取引は、その後また「エゼルレド二世の時(1014)禁止せられた(同王第八法典、第十七章——“And Sunnondaga cyþinga forþode man georne be fullan worldwite.”)。以上のテキストは、それぞれ、アテンボロ前掲書一四六―七頁、ソープ前掲書第一卷二一八頁、また、アテンボロ前掲書一六六―七頁、ソープ前掲書第一卷二四〇―一頁、および、リーバーマン前掲書第一卷二六五頁、ロバートソン前掲書一三三頁、ソープ前掲書第一卷三四四―五頁。

(67) しばしば中世都市の起原に関するいわゆる「garrison theory」の提唱者として喧伝されるメイランドすら、次のごとくに言っているのである。——「『征服』のずっと以前から、ボロウ boroughs に将来其の最も恒久的な特徴を賦与すべき一つの動因が作用し始めていた。ボロウは将来商業の中心たるべきものであった。われわれは、若干の場所は、それらが既に現に行われている交易の集中点であつたばかりで、防禦工事を施されブルグ burs に転換せしめられた、と云う仮説を無下に斥けるべきではない」(F. W. Maitland, *Domesday Book and Beyond* (Cambridge, 1897), p. 192)。又「われわれは、ブルフ burh を「城砦」として、避難場所として、軍事的中心として、「(1) 一般的民族的集会(moots)組織の単位たる、集会有する場所として」(2) そこで市場が開かれる場所として、考えねばならぬ。諸法において此の特徴が際立たしめられるべきときには、当該ブルフはポルトとして語られている、そして多分抑々の初めからそこにはブルフでなかったところのポルトが存したこともあろう」(ibid., p. 195)。又「われわれはボロウの人口を分析することは出来ない。すなわち、われわれはポルトに含意される商業的要素、或いはブルフに含意される軍事的要素を、計量することは出来ない、併し、どう見ても前者は、『マウムズデーブック』の作製に先立つ一世紀間に急速に優勢になりつつあった」(ibid., p. 196)。

(68) Cf. F. W. Maitland, 'The Origin of the Borough', *English Historical Review*, Vol. xi (1896) [The *Collected Papers of Frederic William Maitland*, ed. by H. A. L. Fisher (3 vols., Cambridge, 1911; Reprinted, Tokyo, 1975), III, 34.]

(69) H. R. Loyn, *Anglo-Saxon England and the Norman Conquest* (London, 1962), p. 99.

(70) Maitland, *op. cit.*, III, 35 f., 40.

(71) Charles Petit-Dutaillis, *Studies and Notes supplementary to Stubbs' Constitutional History*, Part I, tr. by W. E. Rodes, ed. by James Tait (Manchester, 1908; Reprinted, 1923), p. 83. 因みに、マンシュレーな名辞が、但しとシタナ

ン語形に於てではあるが、わが諸王の法典上に初めて現われるのは、エドガアの父エアドムンド王の、今日そのラティン・テクトスに残っていない、第三法典第二章に於てである。即ち、いま盗人たることを立證された者が人々に依り生ける形でか死せる形でか捕えられる場合、此の追跡に与かれる人々のうちの誰かに向つて血讐を開始する者の懲罰への参加・協力を拒む者は、王に対し「王への不服従の科料として」二〇シリングを支払うと同時に、ハンドレドに対し三〇シリングを支払うべしと規定しているのが夫れである（: et si quis adire negauerit et coadiunare nolit, emendet regi cxx s..... et hundredo xxx s.）。是れに依つて観れば、当時ハンドレドが既に一個の組織体として確立していたことが知られる。リーバーマン前掲書第一卷一九〇頁、ロバートソン前掲書二二二頁、ソープ前掲書第一卷二五二頁、参照。なお、第二のもののみ、近代英語訳を併載す。

(72) 前掲拙著『形成』九一四、一三三—一三六—一頁、その他の箇所、参照。

(73) [5] [Be gemotum] 7 sece man hundredgemot, swa hi ðær geset wæt, / [5, 1] 7 habbe man priwa on geare burhgemot 7 tuwa scirgemot. リーバーマン前掲書第一卷二〇二—二三頁、ロバートソン前掲書二六—七頁、ソープ前掲書第一卷二六八—九頁、参照。なお、近代英語訳のみ、ウァイトロク前掲史料集、三九七頁。

(74) リーバーマン前掲書第一卷一九二—三頁、ロバートソン前掲書一六—七頁、ソープ前掲書第一卷二五八—九頁、参照。尚、ウァイトロク前掲史料集の三九三頁は、近代英語訳のほか、此の問題多き法典に関する詳細なる解説を付するを以て有用。いま、夫れに拠れば、斯かる四週間毎に開かれるハンドレドの裁判集会は、此の律令の発布以前から存在したことは確実で、ハンドレドが集会を有った場所は、屢々夫れらがきわめて早い時代から、集会の場所であつたことを立證する所の名称を有して居り、また、地方(農村)の土地を、課税賦課上、一〇〇ハイド乃至その倍数という端数の付かない数字で評価している證據も、早期の時代から存在すると。

(75) C. H. V. Sutherland, *English Coinage, 600-1900* (London, 1973), pp. 1-39.

(76) 戸上「アングロ・サクソン鑄貨の機能について」(神戸大学『経済学研究・年報』二〇(一九七三))一四四—六頁。

(77) Loyn, *op. cit.*, p. 120.

(78) 戸上「アヤルスタン王の貨幣政策について」六七頁、また、Loyn, *op. cit.*, p. 120 参照。

(79) Michael Dolly, *Anglo-Saxon Pennies* (London, 1964), pp. 21 f.

(80) 戸上「エドガア王の幣制改革について」(その一)『国民経済雑誌』第一三三卷(一九七六)第二号)六六頁、参照。

因みに、このロウマン・ブリテン時代、軍団(*legio*)の駐屯する要塞(*castrum*)たりしチェスタは、その後八四四年、デインの襲うところとなったが、そのとき既に「一つの無人都市」(*cane uestre ceastre*)であったと言われ、九〇七年に至ってアムンロウ・サウソンが之を再建したのもあろう。Cf. Plummer, ed., *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, I, 88; Whitlock, Douglas & Tucker, eds., *op. cit.*, pp. 56, 61. 而して、この地の造幣所は、此の市の再建後間もなく、建設せられ、アムンロウ・サウソン時代を通じて貫じて活潑に稼動したとされる。Cf. Reynolds, *An Introduction to the History of Medieval Towns* (Oxford, 1977), p. 40.

(18) 斯かる王以外の者の造幣人は、このちエゼルレッド二世 *Ethelred II* (r. 978/9~1016)の時代、その第三法典(九七八—一〇〇八)、第八章第一条に於て、「而して王以外何びとも造幣人を有すべからず (And nan mann ne æge nænne mynetere buton cyng)」と、法的にその存在を否定せられている(リーバーマン前掲書第一卷二三〇—二頁、ロバートソン前掲書六八—九頁、ソープ前掲書第一卷二九六—七頁)。然し、夫れが間もなくまた、「征服」に至る迄に恢復せられたことは、「ドゥウムズデイープク」第一卷第百七十九葉に、「そこ(——ヘリファードシャー Herefordshire の州都ヘリファード)に「エドワード王の時代」七人の造幣人 (*monetarij*) ありき、これらのうちの一人は、その(——ヘリファード)司教の造幣人 (*monetarius*) なりき (Septem monetarij erant ibi. Vnus ex his erat monetarius episcopi.)」とあることに依つて、又、同第二卷百十七葉に「此のボロウ(——ノーファーク Norfolk 州ノリッチ Norwich)に於てその(——ノリッチ)司教は、(——一〇八五年「調査」時)若しも彼にして欲するならば、一人の造幣人 (*monetarius*) を有するを得 (In hoc burgo si uult episcopus potest habere i monetarius.)」とあることに依つて、いささかの疑問の余地なく瞭らかなるところである。ロバートソン前掲書、三二二頁参照。

(82) ウァイトロク前掲史料集、二五八頁、また、戸上一「エドガ王の幣制改革について」(その一)五五頁、参照。

(83) Sutherland, *op. cit.*, pp. 33 f. また、戸上一氏前掲稿、特にその六〇頁、参照。

(未完)

前号拙稿訂正

二頁 一五行目 A. L. Pool —→ A. L. Poole

一三頁 一五行目 九七五年まで —→ 一〇七〇年まで

二三頁 三行目 その六倍もの —→ その十六倍もの

二五頁 一一行目 Assur —→ Asser